

# 山頭火ふるさと館報

平成三十二年四月  
第二号

いあいせい

山頭火ふるさと館  
館長 西田 稔

## 第一回種田山頭火賞 授賞式の開催

一昨年の開館以来、全国から多くの山頭火ファンにお越しいただき、入館者がこの3月で3万3千人を超えました。多くの皆さまにご来館いただき大変感謝申し上げます。

さて、全国の山頭火ブームを裏付けるように、昨年東京の山の上ホテルで多くの報道陣を集めて、山頭火にちなんだ初めての受賞式「第一回種田山頭火賞授賞式」が行われました。

この賞は創業140年を迎える老舗出版社の春陽堂書店が創設し、「信念を貫いた生き方で多くの人々に感動を与えた文化人・表現者を顕彰する」もので、選考委員は作家の嵐山光三郎氏と作家・国文学者の林望氏が務めました。

山頭火の生き様や句は現代人の心を捉えて、全国に山頭火ファンが増えていますが、世俗から外れ融通自在な人生を送った山頭火に背を向ける人もおり、事実、

これまで山頭火に関わる賞といえば、その賞のすべてが自由律俳句に関わる賞でした。何もかも捨てて孤高の旅を続けた山頭火の生き様に焦点を当てた表彰は今回が初めてのことです。

序列や権威とは無縁に己の道を貫いて独自の立ち位置を築いた人として称える賞、正に山頭火のような生き方をした方に贈られる賞として今回第一回目の受賞者に選ばれた方は、舞踏家で俳優の磨赤兒（まるあかじ）さんでした。

受賞者の磨赤兒さんは、「自分にはまだ守るものがあり、山頭火のように何もかもは捨てられない。追いつけぬ山頭火の背中を見つめ、己の創造を尽くせよという十字架を背負って生きましようか」と話しておられました。

この種田山頭火賞はこれからも第二回、第三回と続いていきますので、今後新たに受賞される皆さんの素敵な生き方が全国に発信され、同時に自由律俳句を通して山頭火に親しむ人も増え、その魅力がさらに多くの人に広がっていくことを願っています。



「第一回 種田山頭火賞」授賞式より。

引用元：種田山頭火賞を磨赤兒が受賞、「山頭火には負けてると思います（笑）」（ステージナタリー 2018年9月13日）  
<https://natalie.mu/stage/news/299501>

## 『生きる力。』

山頭火が生涯つくった句は約八万ともいわれておりますが、現在実際に残っている句はそのうちの一万二千句です。この度、山頭火ふるさと館では彼が遺した句の中から皆さんの心に届く句を選んで一冊の本にしました。「生きる力」と題して編集したこの本は、「一人自分を見つめる」「水の如く生きる」「死を詠い生を歩む」「自然とともに暮らす」「ふるさとを想う」の五部に分かれていきます。山頭火の生き様にふれながら、それらの句もぜひ味わってみてください。



▶山頭火ふるさと館編集『生きる力。』  
(春陽堂書店、平成三十年十一月)

### 目次

第一回種田山頭火生授賞式の開催	1
・『生きる力。』	1
特別企画展「山頭火を困む人々」	2
企画展「常識を打ち砕け！自由への誘い	2.3
～自由律という名のルール～	2.3
企画展「淡きこと水の如し	3
～山頭火の愛した水～	3
山頭火・自由律句講座	3
書道コンクール	4
山頭火カルタで書き初め大会	4
山頭火ふるさと館自由律俳句大会	5
第一回自由律俳句大会を終えて	5
収蔵資料紹介	6.7
今後の企画展情報	7
今月の一句アーカイブ	8

特別企画展  
山頭火を囲む人々

会期：平成三十年七月六日(金)

十月八日(月・祝)



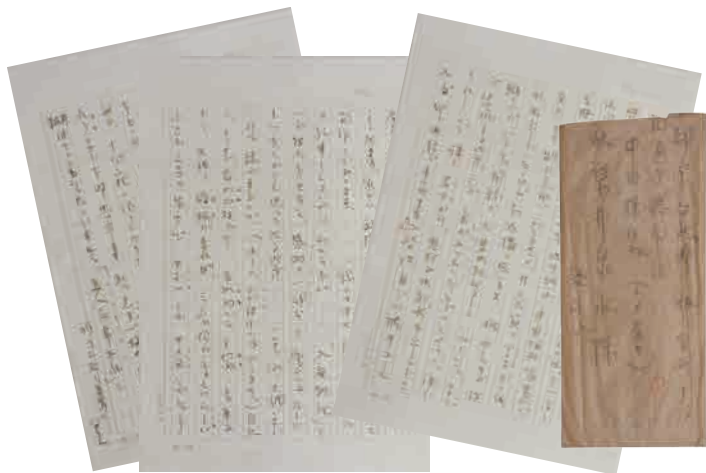
種田山頭火は、その数奇な人生の途上、さまざまな人物と出会い、互いに影響を受け合ってきました。平成三十年度の特別企画展では、それら影響を与えた人物たちの中から、河東碧梧桐（かわひがしへきごとう）、荻原井泉水（おぎわらせいせんすい）、尾崎放哉（おさきほうさい）の三名を取り上げ、直筆資料などあわせて十三点を展示しました。

河東碧梧桐は、自由律俳句へとつながっていく「新傾向俳句」を提唱した人物で、山頭火とは直接面識はありませんでしたが憧れの存在でした。「六朝体（りくちようたい）」という独特な字体で書かれた句「干潟の昼の家をよびたて」などを展示しました。

荻原井泉水は、明治四十四年に碧梧桐等と俳句雑誌『層雲』を創刊し、「自由律俳句」を提唱しました。誌面を通じ、山頭火や放哉等、数多くの自由律俳人を育てています。この特別企画展では『層雲』創刊号を展示しました。

尾崎放哉は、鳥取県邑美郡（現・鳥取市）出身。大正十四年香川県小豆島に南郷庵（みなんごあん）を結び、そこが終焉の地となりました。生前会うことはありませんでした。『層雲』を通じて山頭火は放哉を意識しており、墓参りにも行っています。小豆島尾崎放哉記念館所蔵の、井泉水宛て書簡等を展示しました。

展示資料：『層雲』第一巻第一号（明治四十四年）、【短冊】河東碧梧桐「手をかざせば睡魔の襲ふ火桶かな」、【句幅】河東碧梧桐「雲高く、片かげる清水哉」、【掛軸】河東碧梧桐「干潟のひろの家をよびたて」、【層雲】第一巻第二号（明治四十四年）、【短冊】荻原井泉水「以春風接人」、【短冊】荻原井泉水「わら屋ふるゆきつもる」、【画賛色紙】荻原井泉水「指頭之梅」、【画賛幅】荻原井泉水「ほたらしひとほのあたまの上の月にしている」、【層雲】第七巻第九号（大正六年）、【短冊額装】「元日の灯に家内中の顔がある」、荻原井泉水宛尾崎放哉書簡（小豆島尾崎放哉記念館蔵）、山頭火・井泉水の書



大正十五年 荻原井泉水宛て尾崎放哉書簡（小豆島尾崎放哉記念館所蔵）

企画展  
常識を打ち砕け！自由への誘い  
〜自由律という名のルール〜

会期：平成三十年十月十三日(土)

十二月二日(日)



この企画展では、明治期に確立した近代の定型俳句から自由を求めて、「自由律俳句」が確立されていった時代の作品を展示しました。初めて定型俳句の制約を破った「新傾向俳句」の時代と、雑誌『層雲』が中心となってきた自由を求めた時代に分け、それぞれの時代で山頭火や同時代の俳人が作った新しい形の俳句や、新しい俳句論などを、計十三点の資料を通してご紹介しました。

近代俳句を確立した正岡子規を偲んで山頭火が詠んだ「糸瓜の門に立つた今日わ子規忌」の色紙や、「自由律俳句」というジャンルを表す言葉が初めて使われた文章などを展示しました。

展示資料：【色紙】種田山頭火「糸瓜の門に立つた今日わ子規忌」、河東碧梧桐「続三千里（下）」（講談社、昭和四十九年）、【短冊額】河東碧梧桐「子規庵ほとり風場となりぬ焚くとんど」、【梅雨】（『五句集』通巻十九号 第六月号）※複写資料、荻原

井泉水『新俳句提唱』（立命館出版、昭和七年）、『層雲』第二卷第三号（明治四十四年）、『層雲』第五卷第三号（大正四年）、『層雲』第一卷第四号（明治四十四年）、『色紙』萩原井泉水「水は浅し日くるゝすなへ」、【短冊額】種田山頭火「枯草の中の花である」、種田山頭火第3句集「山行水行」、復刻版『層雲』第二十卷第十号、【掛軸】種田山頭火「もりもりもりあかる雲へあゆむ」

**企画展**

**淡きこと水の如し  
山頭火の愛した水**

平成三十年十二月七日（金）

～平成三十一年二月三日（日）



豊かな水の流れる防府で生まれ育った山頭火には、水に関する句や文章が数多く残されています。それら計十四点の資料から、水に特別な思いを持ち、水のような人生を願っていた山頭火の生き方をお伝えしました。旅の中で詠んだ「こんななうまい水があふれてゐる」（防府市本橋町・護国寺蔵）などの直筆作品のほか、「水の如く詠いたい」「或

る時は澄み、或る時は濁る」「淡如水―それが私の境涯でなければならぬから。」等、水のような人生を送ることを願う文章が掲載されている資料も展示しました。

展示資料・淡如水ラベル3枚（防府市上下水道局作成）、『層雲』第五卷第二号（大正四年）、『層雲』第二十三卷第七号（昭和八年）、【短冊】種田山頭火「秋空たたよう雲の一人となる」、改造文庫第二部第十七篇『奥の細道 芭蕉翁文集』（昭和四年、防府図書館蔵）、有朋堂文庫『枕草子・方丈記・徒然草』（大正十五年、防府図書館蔵）、【掛軸】種田山頭火「分け入れば水音」、【短冊】種田山頭火「水音けふもひとり旅ゆく」（護国寺蔵）、【短冊軸装】種田山頭火「こんななうまい水があふれてゐる」（護国寺蔵）、『山頭火遺稿 三八九集』（昭和五十一年）、種田山頭火第四句集「雑草風景」、【短冊】種田山頭火「濁れる水のながれつつ澄む」（レプリカ）、種田山頭火第二句集「草木塔」（レプリカ）、【画像・六曲屏風】淡如水（護国寺提供）



▶飲用水「淡如水」ラベル（平成十八年／平成二十九年、防府市上下水道局作成）

**山頭火・自由律句講座**

**山頭火を学ぶ会**

**毎月第三水曜日開催**

平成三十年後期は前期に引き続き、山頭火ふるさと会会長の窪田耕二先生、護国寺住職の橋本隆道先生、山頭火ふるさと館学芸員の三人を講師とし、五回シリーズの講座を開催しました。

**自由律句を学ぶ会**

**毎月第二水曜日開催**

三十年度後期も前期に引き続き富永鳩山先生を講師にお迎えし、十一月より計五回開催しました。自由律句についての講義とともに、受講生の皆さんには句作に挑戦していただき、それを講座で評する参加型の講座を行いました。

**自由律句で遊ぼう**

**毎月第四土曜日開催**

小中学生を対象とし、三十年度後期は十一月から計五回開催しました。門田美和子先生を講師にお迎えし、自由律句を作ったり、山頭火の俳句を勉強したりして、楽しみながら自由律句について学びました。



### 書道コンクール

応募期間…平成三十年七月六日～九月十日  
 表彰式…平成三十年十月七日  
 審査員…小・中・高等学校国語教育研究部の  
 先生方四名

市内の小学生から高校生を対象に、山頭火の俳句にちなんだ言葉課題として書道作品を募集しました。五つの部門に分け、小学校一、二、三年生「たび」、三、四年生「ふるさと」、五、六年生「水音」、中学生「山頭火」、高校生「雨ふるふるさとははだしであるく」を書いて表現してもらいました。応募数一九〇点の中から各部門最優秀賞一名、優秀賞一名、佳作三名ずつ計二十二名が（高校の部は佳作なし）選ばれ、十月七日に表彰式が開催されました。  
 受賞者は以下のとおりです。

- |            |           |       |    |
|------------|-----------|-------|----|
| 小学校一・二年生の部 | 最優秀賞 廣谷凌  | 向島小学校 | 二年 |
|            | 優秀賞 池田真輝子 | 富海小学校 | 二年 |
|            | 佳作 松坂茉祐   | 松崎小学校 | 一年 |
|            | 吉田伊織      | 勝間小学校 | 一年 |
|            | 高木ひなの     | 向島小学校 | 二年 |
| 小学校三・四年生の部 | 最優秀賞 松井美空 | 華城小学校 | 三年 |
|            | 優秀賞 甲斐彩夏  | 大道小学校 | 三年 |
|            | 佳作 國弘峻平   | 松崎小学校 | 四年 |
|            | 淺川由佳      | 右田小学校 | 四年 |
|            | 福田千英      | 華城小学校 | 四年 |
| 小学校五・六年生の部 | 最優秀賞 松井乃愛 | 華城小学校 | 五年 |
|            | 優秀賞 境菜々花  | 右田小学校 | 六年 |
|            | 佳作 町田有里恵  | 中関小学校 | 六年 |
|            | 信國友里      | 松崎小学校 | 六年 |
|            | 吉田ゆり      | 松崎小学校 | 六年 |

中学生の部  
 最優秀賞 山本知咲  
 優秀賞 加納愛  
 佳作 石川未妃

河川晴香  
 加藤優月

高校生の部  
 最優秀賞 藤井沙紀  
 優秀賞 濱田百果

大道中学校 三年  
 桑山中学校 一年  
 華陽中学校 二年  
 佐波中学校 三年  
 佐波中学校 二年  
 防府商工高校 一年  
 防府商工高校 一年

▼表彰式の様子



▲受賞作品の展示

### 山頭火カルタで書き初め大会

平成三十一年一月五日（土）、市内と山口市の小学生十四名が参加して「山頭火カルタで書き初め大会」を開催しました。読み札にある山頭火の句を子どもたちが順番に読み上げ、声に出して山頭火の句を味わいました。その後、取った札の中から好きな句を選び、短冊に書き初めをしました。毛筆初挑戦の参加者もいましたが、皆さんそれぞれに自分らしいすてきな表現ができました。書き初め作品は、山頭火ふるさと館内の市民ギャラリーに展示し、来館された皆様にも見ていただきました。

▼書き初めの様子



▼カルタ取りの様子



第一回山頭火ふるさと館  
自由律俳句大会

募集期間：平成三十年六月一日

～十二月三十一日

表彰式 平成三十一年二月十日

選者 富永鳩山・門田美和子・西田稔

(敬称略)

山頭火や自由律俳句により多くの方に親しんでいただくことを目的とし、当館主催で自由律俳句大会を開催いたしました。六か月間の募集期間で全国から計一八七七点(一般の部一五六九点、小・中学生の部三〇八点)の作品の応募があり、その中から計十五名が受賞されました。結果は次のとおりです。

一般の部

【最優秀賞】

乳の匂いする日和りへ抱き上げる

東京都 本山麓草

【優秀賞】

日傘くるりあぜ道の分校教師

山口県 河野采女

小さな母の小さくなってゆく車窓

東京都 さいとうこう

人差し指一本で打つ「月がきれいだ」

兵庫県 ベンジャミン

【佳作】

命をつなぐ点滴の無言

山口県 尾崎久江

憲法の権威どっぷりと炬燵

東京都 貞住昌彦

鎮守の森に愚痴ひとつおいてくる

山口県 田村陽子

消灯した教室が話したがる

大阪府 中井靖子

無人駅にひとりぼっちを置いてくる

山口県 中村好徳

小・中学生の部

【最優秀賞】

ブランコにのるぼくとちようちよ

愛媛県小3 岡田隼典

【優秀賞】

秋空に引くひこうき雲の対角線

山口県中3 佐世沙貴子

ゆめはね2つあつてえらべない

山口県小3 田中絢菜

【佳作】

誰もいないバス停を吹き抜けた北風

東京都中2 魚地妃夏

くもりの遠足みんな笑えば空も笑った

山口県小6 峰駿介

月があかるい弟と歌う

愛媛県小3 吉田琉聖



自由律俳句大会表彰式

選者の言葉

第一回自由律俳句大会を終えて

選者・富永鳩山(群妙主宰)

山頭火や自由律俳句への理解が一層深まるよう、この度、山頭火ふるさと館主催で初めての全国自由律俳句大会が開催されました。投句数が心配されましたが、一般の部は千五百句、小中学生の部は三百句を越える投句がありました。山頭火には自嘲の句や、人間の弱さを詠った作品が多く、それが山頭火の魅力でもあり現代を生きる人々の共感を呼んでいます。この度の選をするにあたって、山頭火ふるさと館のオーブンにふさわしく「生きる力」とりわけ「明日へ生きる力」を考えてみました。最優秀賞の句は一般の部も小中学生の部もこのテーマに沿い、自由律俳句ならではの表現の豊かさや、優しい言葉遣いで読者の想像力をかきたて、温かい気持ちにさせてくれる句でした。こうして一つの役割を果たした「山頭火ふるさと館」は自由律俳句の表現の拠点としての一歩を踏み出しました。これを機会に多くの人々に自由律俳句に関心を持っていただき、この活動が広がっていくことを期待しています。山頭火の代表作である

分け入つても分け入つても青い山

は、大正十五年、大正最後の年に生まれました。そして今、平成から新しい元号を迎えようとしています。

## 収蔵資料紹介

前回に引き続き、明治四十四年十一月号の棕鳥会五句集『夜長』を紹介していきます。

棕鳥会（むくどりかい）は防府を中心とした俳句結社であり、句会の開催や回覧雑誌「五句集」の発行などの活動を行っていました。当時三十代であった山頭火は酒造場を営む傍ら、この結社に所属し、俳句活動を行っていました。

今回は、五句集『夜長』のうち、巻末の「俳楽屋」という部分を抜粋して紹介します。

## 棕鳥会五句集 十一月号『夜長』 翻刻

## 俳楽屋

一 今回は讃岐より出句せられて大に光彩を添えたり。願くは更に容捨なく批評せられんこと。

一 従来の弥生吟社余りに平凡なれば今回

棕鳥会と改名し茲に一線を画して大に発展せんとす。

一 先ず第一に幹事が妄評を試むるは大に僭越なれども筆序に御さきに失礼。

十一月五日 夜長の窓に 鹽仏

【四十二・オ】

新たに諸俳剛の御援助を得て幼稚なりし此五句集も茲に数所の面目を改めたるを悦ぶ。

弥生吟社を棕鳥会としたるは佳矣。

幹事の御尽力を謝す。

毎号選句、五句覚束なきに困難なりしが今回は予選

八句を得て之れにも困難を感じたりき。掟を尊重して

三句丈割愛したるは遺憾なりし。

例によりて見当違ひの駄評を試む失礼多謝。

改めて諸俳豪の御指導を願ひおく。

天凡拜

【四十二・ウ】

一、五句集の発展を喜び、以後益々発展せむことを禱る。  
一、四国の諸兄より出句せられたるは感謝に堪へず、将来□□  
尽力あらむことを希ふ。

一、同人もだいぶ多人数となる事故此際活版か又はトウ写版かで

【四十三・オ】

印刷してはいかにや、そして二枚程各人に配布し、一枚はとつておき一枚に評をかいて幹事に送り幹事がそれを集めて採点製本して回覧に附してはいかにや、かくすれば□□て不便少くして回集多かるべしと思ふ、費用は安くて

すむだらうと思ふ、  
一、僕には此頃スツカリ蛮勇がなくなつた、何か蛮勇回復策はありますまいか、  
田螺公

【四十三・ウ】

又蛮勇回復策論者ノ田螺公ニハ全感デアル。生毛海上生活ヲ放レテ一年、今ノ生活状態ガ如何ニモ物足ラン様デ何ダカ強烈ナ刺激ガ欲シクテタマラン

【四十五・オ】

○田螺公兄は蛮勇回復策を欲せられるが何にそれは□□はないではありませんか。一つ水滸伝でひっさげて鬚武者に仕立て、清国へ飛び込んでは何うですーーー呵々 紫萍乱筆

○革命軍も大分景気が悪いから田螺兄が之れに投しても駄目ならん。寧ろ台湾に渡りて、蛮地を跋渉する又蛮勇回復策の一方法ならんか。 蛮勇に君が句活きて河豚汁

【四十六・オ】

## 凡例

一、旧字体は新字体に改めた。

ただし、固有名詞及び俳句の表記は原文に従った。

二、適宜、濁点及び句読点を補った。

三、ページ数は、一丁の表を【一・オ】、二丁の裏を【二・ウ】と記した。

## 【解説】

今回は、『夜長』巻末の「俳楽屋」から一部を抜粋した。

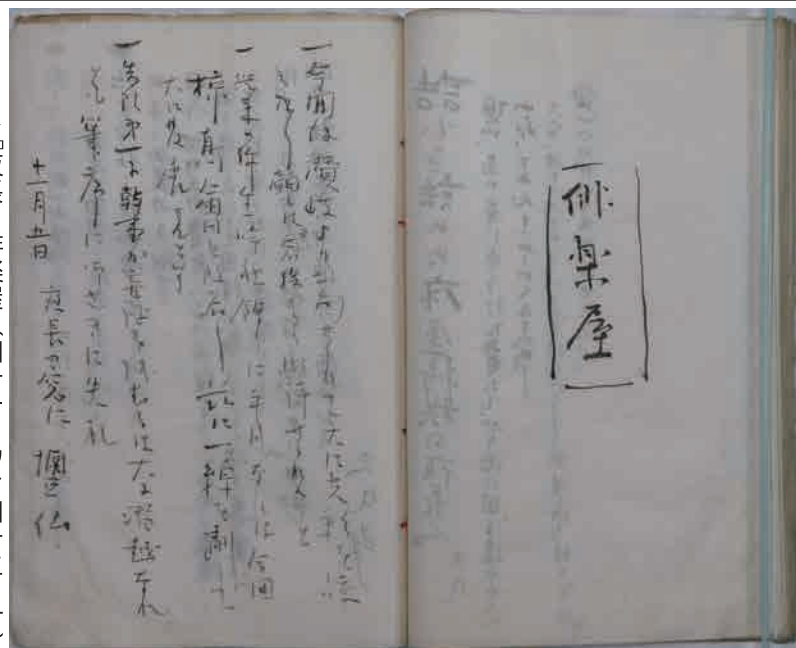
まず、冒頭に『夜長』の幹事であった鹽仏（えんぶつ）による文章が日付とともに書かれている。その文中、「従来の弥生吟社余りに平凡なれば今回棕鳥会と改名し」は注目すべき部分である。明治四十四年十一月号であるこの『夜長』の表紙には、「棕鳥会」の文字がある。「棕鳥会」以外に、「弥生吟社」という結社があることが分かっており、明治四十四年七月の五句集『夏の蝶』の表紙には「弥生吟社」と記されている。こ

の二つの結社の関係について、鹽仏のこの文章から、明治四十四年十一月に、「弥生吟社」が「棕鳥会」に改名したということがわかる。実際、これ以後に発行された五句集の表紙には、「棕鳥会」の文字が見える。続く天凡（てんぼん）佐田真作の文章からも、五句集が認められていくのを実感している様子がかがえる。さらに山頭火（当時は田螺公（でんらこう）という俳号で活動していた）による文章を読むと、山頭火が五句集の発行の方法について、印刷することや、よりよい回覧の方法について提案していることが分かる。これらのことから、小さな結社であった「弥生吟社」が新たな俳人を迎え入れて、「棕鳥会」として俳句活動を活性化させていこうとしていたことがうかがえる。

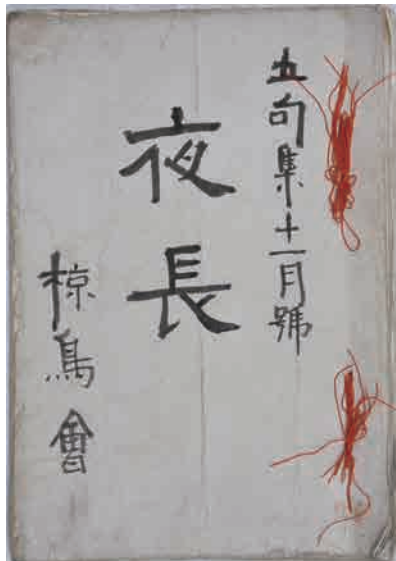
さて、山頭火は、「蛮勇」についても述べている。「蛮勇」とは、「向うみずに突進する勇氣」の意（小学館『日本国語大辞典』）。蛮勇を回復する策はないでしょうか、と山頭火が書くのと、回覧順序が山頭火より後の人々がそれに答えるように「蛮勇」に触れている。一つ目は、漣月（れんげつ）河村亀市の文章で、山頭火に同感している。一方、二つ目の紫萍（しへい）山本國歳と三つ目の鹽仏大塚久五郎は、蛮勇回復策を具体的に提案している。紫萍は清へ行くことを提案しているが、『夜長』が回覧されていた明治四十四（一九一）年十一月の清は、辛亥革命がおこって間もないころであった。文末にある「呵々」は、現代の、「（笑）」に近い。蛮勇回復策として冗談で極端な提案をしているのである。鹽仏は、山頭火のこの一文に「面白いから」と傍点を付したうえで、紫萍のこの言葉を真面目に受け、清の革命に触れながらも、台湾（当時は日本の統治下にあった）へ渡ること提案している。文末の「蛮勇に君が句活きて河豚汁」は、鹽仏による句である。蛮勇は句を作ることで回復できると、山頭火にアドバイスしているようである。

このように、五句集の末尾には回覧しながら

各人が意見や胸の内を記していたことがうかがえる。中でも山頭火は、五句集の発行方針を提案するなど、棕鳥会の活動に積極的に関わっていたことがわかる。



▶『夜長』俳楽屋（四十一・ウ、四十二・オ）



▶棕鳥会 五句集『夜長』表紙

今後の企画展情報

コレクション展示

山頭火を書いた現代人

会期 四月十三日（土）～六月二十三日（日）  
大正から昭和初期にかけて活躍した自由律俳人として知られる山頭火は、その生き方・俳句によって現代に生きる我々をも魅了します。

今回の企画展では、山頭火ブームの火付け役となった永六輔や、防府市にゆかりのある方々等、現代人七名を取り上げ、それらの人々が山頭火句を書画で表現した作品を展示します。

現代まで衰えない山頭火の魅力をぜひ身近に感じてみてください。

企画展「自然を詠う」

会期 六月二十八日（金）～九月八日（日）  
山頭火の旅の基本は徒歩でした。歩き続けるなかで感じる自然の厳しさと優しさ。そして、ひとりで暮らす日々季節の移ろいをもたらす彩。いつくしむ心で見た山頭火独自の自然への賛美を感じてください。

企画展「周防三羽鳥

山頭火と白船・碧松

会期 九月十三日（金）～十二月八日（日）  
明治四十四（一九一）年、俳人萩原井泉水は、従来の定型にこだわらない自由律俳句の雑誌『層雲』を創刊しました。全国から多くの投句があった中で、井泉水は種田山頭火、久保白船、江良碧松という山口県から投稿する三人の若者に着目し、「周防三羽がらす」と讃えその才能を高く評価しました。三人は、明治から大正時代にかけて交流を深めた後、それぞれの人生を歩み、異なった作風の句を残しました。

今回の企画展では、山口県を代表するこの三人の自由律俳人とその作品を紹介します。

## 今月の一句 アーカイブ

山頭火ふるさと館では毎月山頭火の句を一句選んで皆様にご紹介しています。これまでにご紹介した「今月の一句」を振り返ります。

平成三十年

六月 水田青空に植ゑつけてゆく

昭和七年六月十七日

下関・川棚の木下旅館に宿泊している時期に詠んだ句で、青空が映る水田を「青空」と言い表し、「青空に植ゑる」というように、幻想的な印象を与える工夫がみられます。

七月 山のしづかさへしづかなる雨

昭和十一年七月十九日

山頭火は昭和十年十二月から「死に場所を求めて」旅に出ました。最後に立ち寄ったのは福井県の永平寺です。山奥の静かな場所に雨が降り、静寂がいつそう深まるように感じられる情景が浮かび、心が落ち着いている山頭火の様子が伺えます。

八月 うぶすな神のおみくじをひく

昭和七年八月四日

日記から、現在と同じように防府天満宮では御誕辰祭が行われていたことがわかります。「うぶすな」は「産土」と書き、生まれた土地の守り神のことを言います。山頭火にとっては防府天満宮が「うぶすな」であり、それはふるさとを離れた後も変わらぬ思いでした。

九月 三日月よ逢ひたい人がある

昭和七年九月五日

山頭火はこの三日月を「はかないもの」と日記で言っています。それは形が細いというだけでなく、夕方西の空に見えたとしたらすぐに沈んでしまうことも意味しています。ひとりを

寂しがり、人を恋しがる様子がうかがえ、人間らしさが垣間見える句です。

十月 秋空、一点の飛行機をゑかく

昭和五年十月二十六日

秋晴れの雲がひとつもない青空に、飛行機だけが映えて飛んでいる様子が思い浮かびます。また、空を青いキャンバスに見立て、一点を打って飛行機を描くことによって、この句の風景が出来上がっていく様子も想像できます。

十一月

実ばかりの柿の木のなんとほがらかな空

昭和九年十一月十四日

葉が散って実ばかりになった柿の木と、その背景に見える青空を詠んでいます。実の橙色と空の青、鮮やかな色合いが目につくかぶようです。この頃山頭火は歯が抜けて硬いものは食べられなかったようですが、音や色や感触で味わえると言っており、この句もまさに目で味わっているような句です。

十二月 凧のふけてゆく澄んでくる心

昭和七年十二月二十三日

冬の冷たい風が吹きぬけて心が澄んでいく感覚を詠んだものです。木枯らしが全身を駆け巡り、その冷たさによって滞っていたものが浄化され、冴えわたっていくような感覚が読み取れます。

平成三十一年

一月 わが庵は雪のあしあととすぢ

昭和八年一月二十六日

小郡の其中庵に暮らしている頃、友人の国森樹明へ子どもが生まれたお祝いの葉書を出して帰ってきた際の句と思われまます。出かけたとき雪の上についた自分の足跡が降り積もる雪です。で見えなくなっており、庵に戻ってきた足跡のみ残っている情景を詠んでいます。

## 山頭火ふるさと館のご案内

平成三十一年四月一日より、  
観覧料が無料となります。

開館時間

午前十時から午後六時

(ただし、特別企画展の開催中は、展示室への入室は午後五時三十分まで)

休館日

毎週火曜日(祝日の場合は次の平日)

十二月二十六日～十二月三十一日まで

観覧料

無料

※なお、特別企画展を開催する際、観覧料を設ける場合があります。

アクセス

防府駅てんじんぐちから約一・五km

まちの駅「うめてらす」から約一〇〇m

山陽自動車道防府東・西ICより約七分

駐車場

普通車用三台、身障者等用二台(ふるさと館横)

無料観光駐車場二十五台(ふるさと館斜前)

山頭火ふるさと館報

第2号

平成31年4月1日発行

編集・発行

(公財)防府市文化振興財団

山頭火ふるさと館

〒747-0032

山口県防府市宮市町5番13号

電話 0835-28-3107

FAX 0835-28-3113

印刷

大村印刷株式会社

防府市西仁令一丁目21番55号